

テイワット大陸転生紀

taka@半魚人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ごく普通のサラリーマン【斎藤 正（さいとう ただし）】。

彼は仕事が終わりに、家に帰っている途中で車に跳ねられてしまう。

目が覚めると、見知らぬ砂浜。

そこで一人の男の子に出会うのだった……。

モンドを始めとする、各国を旅していく物語。

目次

始まり	1
出会いの一日	8

始まり

俺、斎藤 正という男の人生は本当に平凡だった。学歴はまあまあ、給料も悪くない。

なんら不自由のない生活を送っていた俺だったが、仕事が終わりに帰っていたところ。車に跳ねられた。

しかも轢き逃げされるといふ。

薄れる意識の中、何度も“生きたい”と願った。だが運命は無慈悲にも俺を死へと誘う。

ああ、もう眠いや。

目を閉じたらどうなるんだろうか。

死ぬというのは、どういうことなんだろうか。

そして俺は、考えるのをやめた。

重い瞼を持ち上げると、青空が広がっていた。

轢かれたのは深夜のこと。

もう夜が開けたのか。

てつきり死んだと思っただが、気絶してただけなんてな。

昨日のことを思うと恥ずかしくなる。

そろそろ体を起こすか。

仰向けに寝てた上半身を起こす。

「ここどこだ。」

思わず声が漏れる。

なんで砂浜にいるんだ。

とりあえず辺りを見回してみよう。

一体ここは日本のどこだ？そもそも日本なのか定かではないんだが。

頭が回らず、ボーツとしていると。

ぐちゃぐちゃと気持ちの悪い音が近付いてくる。

音の方を向くと、巨大な青色のスライムが近寄ってきた！
逃げないと！

本能が危険だと言っている。殺される！

だが、思うように動けない。

足がじんじんと痛む。もしかして捻挫してるのか。

しかし逃げなくては。

痛む右足を引きずるように走って逃げる。

「うわっ！」

浜に転がっていた貝殻に足を引つ搔けて躓いてしまった。

後ろを見るとすぐそこまでスライムが迫って来ていた！

今度こそ死んでしまうのか……。

覚悟して目を瞑る。

「風神っ！」

風が勢いよく前髪をかすめたのを感じた。

恐る恐る目を開くと、そこには一人の男の子がいた。

「大丈夫？」

男の子は俺に手を差し伸べてくれる。

俺はその手を掴むと、その非力な身体からは考えられない力で起こ

される。

「おじさん大丈夫か？」

男の子の体から幼稚園児ほどの女の子(?)が出てきた。

しかも浮いてる?!

「良かったな、こいつが来てなかったら危なかったぞ。」

「ああ。ほ、ほんとにありがとう。」

「んー？おじさん。見慣れない格好だな。どこの人だ？」

と言われても、そっちこそ見慣れない格好なんだが。

しかし、日本語が通じるし、相手も日本語ということはここは日本
なのか？

「俺は、日本人だが。」

「二ホン？聞いたことないな。聞いたことあるか？」

男の子は首をふる。

「それじゃあ、ここは一体？」

「ここはモンド。自由の都さ！」

モンド？地球上にそんな国があったなんて。

世界は広いとは言ったものだが。

「そんなことより空。ヒルチャールの集落はここら辺じゃないか？」

空と呼ばれた男の子は、頷く。

「でも、このおじさんをこんな場所に置いてくのは良くないな。」

「放っておけないね。ヒルチャールを片付けて城内に案内しよう。」

「あ、あの。俺は一緒に行けばいいのかい？」

「おう！こいつに任せれば大丈夫だぞ！」

そして俺はこの子たちについていくことになった。

歩いてる最中のこと。

「そういえば、おじさん名前は？」

「ああ、俺は斎藤っていうんだ。」

「サイトーか。変わった名前だな。」

「そっちは？」

「オイラはパイモン！そしてこいつが旅人の空。よろしくな！」

「ああ、よろしく。」

俺たちは軽く自己紹介を済ませ、空くんの目的地まで向かう。

「ここだな。」

パイモンちゃんが指を指すほうには、民族衣装のような服を着て、

仮面をつけた人（？）が何人かいた。

「あれが多分ここいらで悪さを働いてたヒルチャールだな。」

「サイトウさんはここで待っていて。」

空くんはそう言つて、草むらに俺を残しヒルチャールとかいう人たちに向かつていった。

そこでは何が起きているのかさっぱりだった。

空くんは何もないところから風を生み出したり。

急に出現した短剣でヒルチャールを斬りつけたりと、戦いだした。

あつという間にヒルチャールたちは全員倒されてしまった。

あんな若いのになんて強さだ。

「おまたせ。」

空くんは武器を消して、こっちに帰ってきた。

「どつても強いんだね、空くん。」

「いや、それほどでも。」

「なんてたって、こいつはモンドの英雄だからな！」

そういえばさつきまで居なかったパイモンちゃんが急に現れる。

そして俺たちは、また歩き始めた。

しかしよく考えていなかったけど、俺はスゴいものを見ている気がする。

ここは本当に俺のいた世界なのか？

異世界に来たような気分だ。いや、もしかしたら本当に異世界かもしれない。

そうこう考えてるうちに、大きな砦の前までやってきた。

「着いたぞー！とりあえずキャサリンに報告とサイトーのことは西風騎士団に連れてくか。」

割りと大きな石橋を渡る。

周りからの視線が怖い。

他人から見たら俺はただの不審者でしかないもんな。

大きい門の近くまで行くと。

槍を持った男に話し掛けられる。

「待ってくれ榮譽騎士！その人は誰だ。」

「それがオイラたちにも分からないんだ。だから騎士団に連れていきたくて。」

「なに？余計に怪しいな。取り押さえた方が……。」

どういうことだ？俺捕まっちゃうのか？

空くんは俺を庇うように立つ。

「乱暴はやめてあげてくれ。多分彼は悪い人じゃないよ。」

「そ、空くん。」

「うーん。まあ榮譽騎士が言うのなら信じよう。それじゃ案内はまかせたよ。」

怖かったなあ。警察に職質されてる気分だった。

「それにしてもありがとう空くん。」

「気にしないで。」

そして俺たちは砦の中に入る。

そこには西洋のような、日本で例えるならドイツ村のような町並みが広がっていた。

不思議な気分だ。海外旅行なんて行ったことがない人生だったし、新鮮な気持ちだな。

入ってすぐの受付のような場所で空くんたちは話をしている。

俺の事情も軽く話をしていたようだ。

城内を進んでいくと石造りの建物にやってきた。

そこにも槍を持った人がいたが俺のことは知っていたみたいで中に入れてくれた。

建物に入ると、手前の左の部屋に案内される。

扉をノックしすると、女性が返事をしてくれて、中に入る。

中に入ると、金髪の女性が奥に座っていた。

「やあ荣誉騎士。話は聞いてるよ。」

綺麗な人だな。

「騎士団前の兵士もそうだったけど、情報がはやいな。」

「こんな小さいんだ、すぐ伝わるよ。」

「あ、あの。」

「すまない。とりあえず自己紹介しようか。」

女性は席をたち、俺たちの前にやってくる。

「私はジン。西風騎士団の代理団長を務めている。」

「ど、どうも。俺は斎藤といいます。」

癖で名刺を取りだそうとするが、鞆はなく。ポケットにすら何も入ってなかった。

「? サイトウだね。貴方に関してなんだが。」

「どうするんだ?」

「荣誉騎士。彼を預けていいかな?」

「こいつに?」

「ああ。まだしばらくモンドに居るんだろう？我々騎士団も援助するが、君に任せても良いだろうか？」

「どうするんだ？空。」

「俺は空くんの方を向く。」

「空くんは俺を見てニコツと笑う。」

「わかりました。」

「彼はジンさんに了解の意を伝えた。」

「ありがとうございます。そう言って貰えると助かるよ。」

「俺からもありがとうございます。」

「なんて優しい子なんだ。」

「見ず知らずの俺に優しくできるなんて、正義感に満ち溢れた少年だ。」

「しかし、今日のところは騎士団で預かるよ。サイトウ、泊まっていくといい。」

「ありがとうございます。この恩は忘れません。」

「いいんだ。こんなところに来て混乱してるだろう。気にしないでくれ。」

「優しい世界だ。」

「こんなにも人の暖かさを感じたのは何年ぶりか。」

「そう思うと、体から力が抜けて座りこんだ。」

「すると、だんだん目頭が熱くなっていく。」

「大丈夫かサイトー？」

「ああ、うん。安心したらなんだか涙が。」

「ジンさんが俺の肩に手を当ててくれる。」

「辛かったんだろう。頑張ったんだな。」

「そんなこと言われたら。」

「俺は自分の立場なんか考えずに、泣きじゃくった。」

「心の奥にしまいこんでいた恐怖と不安が一気に爆発した。」

「今だけは泣いてもいいかな。」

「こうして俺の一日が終わった。」

そして明日からまた、奇妙な一日が始まるだろう。

続く

出会いの一日

目が覚めると見知らぬ天井。

覚めても尚、昨日の事が夢のようだ。

夢であつてほしいと思うほど、現実離れた出来事の連続だった。さて、大の大人が泣きに泣いて醜態を晒したわけだが。なんて恥ずかしい。

昨日は泣き疲れてぐっすり寝たし、目覚めは悪くない。部屋を出よう。

部屋を出てみると、ドンツと誰かがぶつかってきた。

「だ、大丈夫?」

ぶつかってきた方を見てみると、尻餅をついた女の子がいた。

「ク、クレーは大丈夫だけどおじさんは大丈夫?」

「うん。俺は平気だけど。」

自らをクレーと名乗るこの子はバッグを背負い赤い衣服を身に纏った小学生ぐらいの女の子だった。

「こらクレー、あまり走るないつも言っていただろう。おや? 起きていたんだねサイトウ。」

「おはようございますジンさん。昨日はありがとうございました。」

ジンさんと話しながら昨日の事がフラッシュバックする。

なんだか顔を合わせるのも恥ずかしい。

「おじさんジン団長とお知り合いなの?」

「う、うん。色々あつてね。」

「それより自己紹介は済ませたかクレー。」

「あ!クレーはクレーだよ。よろしくねおじさん!」

「俺は斎藤。よろしくねクレーちゃん。」

なんて礼儀の正しい女の子なんだ。可愛い。

「これからクレーは見回りに行つてくるから、じゃあねサイトウおじさん。」

と言つてクレーちゃんは行つてしまった。

嵐のように去つていったな。

「ああいう子なんだ。気にしないでくれ。」

「え、ええ。大丈夫ですよ。」

あんな小さな女の子も騎士なのかな？勇敢だなあ。

「なんだか楽しそうね、ジン。」

「リサ。おはよう。」

「おはよう。そちらの方は噂の・・・。」

もう噂になってたのか。

「あ、はい。初めまして斎藤と申します。」

「礼儀正しいのね。私はリサ、図書館の司書をしてるわ。よろしく。」

「よろしくお願いします。」

綺麗な人だな。図書館の司書にしては格好が派手な気もするが。

この人も騎士団の一員なんだよな、色んな人がいるなあ。

「サイトウ。折角の機会だ、モンド城内を観光していつてくれ。」

「わかりました、この度はありがとうございました。失礼します。」

そして俺はジンさんたちに別れを告げ、騎士団をあとにした。

騎士団の大きな扉を開き、朝の暖かい日差しが俺を包み込む。

気持ちいいなあ、こんな平穏な感じ久々だ。

「お！サイトーが出てきたぞ。」

声の方へ向くと、空くとパイモンちゃんがいた。

「改めて今日からよろしくね二人とも。」

「こいつがいれば安心だぞ！」

そして俺たちはモンド城内を散策することにした。

「ここは鹿狩り、ここステーキは一級品だぞ！」

「丁度良いし朝御飯にしようか。」

「俺はお金が無いけどいいのかい？」

「大丈夫。モラに関しては問題ないよ。」

「もら？それは通貨みたいなもの？」

「そう、モラはテイワットの通貨。岩神モラクスの名前からとられるんだ。」

神様か、この世界では神が実在してるのか。その類のものは信じて

いなかったけど、この世界には居るんだな。

この世界について何も分からないな。基本的なことから学んでい
かないと。

「なあなあ空、早く食べようぜ、オイラお腹ペコペコだぞ。」

「はいはい。それじゃテイクアウトして食べ歩こうか。」

鳥肉と野生キノコの串焼き、大根の揚げ団子というのを三人で一本
ずつ買い観光を始めた。

大聖堂であつたり花屋、鍛冶屋など色んな店があるんだと紹介され
た。

個人的に気になったのはキャッツテールというバーとエンジェル
ズシエアという酒場があつたこと。

お酒は好きだし、いつか行つてみたいな。

昨日、城内に来たときに空くんたちが最初に行った場所、そこは冒
険者協会といつてこの世界では冒険者が職業になっていることを
知つた。

と、城内を観光していたらすつかり夕方になつてしまった。

すると、空くんたちは冒険者協会の任務でここを出ると言つて、俺
に宿屋だつたりご飯の資金をくれた。

空くんたちと別れた後、俺は気になっていたエンジェルズシエアに
行つてみることにした。

扉を開くと、カウンターにいた赤髪の男がこつちに話しかけてく
る。

「いらつしやい。見掛けない服装だな、他所の国から来たのか。」

「ど、どうも、そうなんです。」

なんだか真顔で見つめられると怖いな。

「まあ座りなよお前さん、飲みたいんだろ。そんな顔してる。」

今度はカウンター席の眼帯の男から話し掛けられる。

男の隣の席に座つて、メニューを見てみた。

蒲公英酒？気になるな。

というかメニュー日本語なんだな、なぜか俺が読めるようになって
いるのか。便利だな。

「この蒲公英酒っていうのください。」

赤髪の男は頷き、準備を始めた。

「初めてにしては良いもの頼むじゃないか、お前さんとは気が合いそうだ。」

「これは名物みたいなものなんですか？」

「ああ、モンドに来て蒲公英酒を飲むのは基本のきだぜ。」

へえ、余計に楽しみになってきた。

「それよりお前さん、最近噂になってた放浪者だろうか？」

「え、噂になってたんですか。」

「なんせこいつは騎士団の人間だからな。ほら。」

と言つて赤髪の男は頼んでいた酒を差し出してきた。

「ネタバレが早いな。俺はガイア、西風騎士団騎兵隊長を務めてる。よろしくなサイトウ。」

「名前まで知られてたんですね。なんだか恥ずかしいなあ。」

「モンド城内じゃあ一躍有名人だぜ。あんたも知ってるんだろ。」

ガイアさんは赤髪の男を見て言った。

「まあな。アカツキワイナリーの情報網を舐めてもらつては困る。」

「ははは、流石だな。まあこれも何かの縁だサイトウ、今日は飲み明かそうじゃないか。奢るぜ。」

「そんな初対面で奢ってもらうなんておこがましいですよ。」

「気にするな、奢らせてくれ。」

俺みたいなのやつに金を払ってくれるなんて優しい人なんだな。

モンドの人たちは優しい人ばかりだ。心が温かくなる。

すると、入り口の扉が開く。

「おや、もうみんな飲み始めてるのかな？」

酒場には似合わない、男の子が入ってきた。

「これはこれは、吟遊詩人さんじゃないか。」

「今日も歌いに来たよ。ボクを待ち焦がれたでしょ？」

「そんなことを言つて、ただ飲みに来ただけだろ。」

顔見知り同士なようで、三人は仲良きそうに会話している。

「おや？ 見ない顔だね。ボクはウエンティ、吟遊詩人さ。」

「俺は斎藤っていうんだ。君みたいな子供もこんなところにくるんだね。」

「ちよつと！こう見えても君より遥かに年上だよ。お酒だって飲めるよー。」

「え！それはすみません。」

「まあいいけどね、それより隣いいかい？」

ウエンティくんは俺の隣に座って酒を頼んだ。

「サイトウって言ったね。単刀直入に聞くけど君は一体何者だい？この世界の人じゃないよね？」

「えっ！分かるんですか！」

「そんな身形はボクの知ってる限りじゃ見たことないからね。」

ビツクリしたな。でもこれで俺のいた世界とは別だということが確信できたぞ。

しかしなんで俺なんかが異世界に来てしまったんだろう。

その後、ここにいるガイアさん、ウエンティくん、そしてディルツクさんというこの赤髪の男性に俺の境遇について説明してみた。

「あのモンドの荣誉騎士に似た境遇の人がいたなんてな。」

「もしかしたら、旅人の言っていた神と関係があるのかもしれないね。」

「もとの世界に帰れたらいいな、サイトウ。」

「はい。でも、こここの居心地は最高ですよ。俺が生きてきた中で最も。」

「それなら良かった。」

こうして話し込んでいるうちに夜も更けてきて、エンジェルズシアを出ることにした俺は、みんなに別れを告げる。

「今日はありがとうございました。あなた方と出会えて良かったです。」

「ボクたちも良かったよ。これも風神の導きがあったのかな？ふふ。」

「俺も出会えて良かったよ。また飲もうじゃないか、待ってるぜ。」

「ありがとうございますガイアさん、それでは。」

「君に風神のご加護があらんことを、じゃあね。」

今日はモンドの沢山の人と交流してきたな、赤の他人の俺なんかに優しく接してくれたり。

なんだか友達が増えた気分だ。

この歳になると新しく人と交流する機会なんてほとんど無かったしな。

いやはや、今日は本当に充実した一日だった。

そして今日の寝床も決まったし、寝るとしよう。

明日はどんなことが待っているんだろうか。

そして俺はもとの世界に帰れるのかな、まあ今考えても仕方ないか。

明日のことは明日の俺に任せるとしよう。

こうして俺は、ベッドの中で眠りについた。

続く